

## ガネーシャ大学とタナロット寺院訪問の報告

加藤 房江  
(こども学科 准教授)

### ガネーシャ大学との交流

2日目の研修は、デンパサールにあるガネーシャ大学とバリ・ヒンドゥー教の聖地タナロットを訪問した。

ガネーシャ大学は、教育学部と附属の幼稚園が併設されている。ガネーシャ大学への訪問は、今回で2度目になり、先生方や学生達は、笑顔で迎えてくれた。ガネーシャ大学の学生からの伝統

的な歓迎の舞踊で、熱烈な大歓迎ぶりが伝わり、大変嬉しく親しみを感じた。

次に壮大なイメージのインドネシア国家に斉唱が行われた。私たち埼玉純真短期大学も君が代を歌い、本学学長からも、分かりやすいことばで、熱烈な大歓迎に対する感謝と両大学の友好が深まるようお話があった。



ステージでは、ガネーシャ大学附属幼稚園の男児4人による舞踊が、緊張しながらも勇ましく披露された。それに続き、バリの伝統的な衣装を身につけた3人の女の子がスタンバイしていて、ファッションショーが行われた、中でもシャナリシャナリとおすましして歩く女の子の様子に、会場の先生方から、ほほえましく包みこむような笑いが起きていた。

日本の伝統文化を広めるにあたり、今回、バリ島幼児教育研修に参加して下さった羽生興武館(剣道場)館長の早川一郎様、宗孝様親子による剣道のパフォーマンスが行われた。ガネーシャ大学の

先生方や学生達は、おそらく初めて見たであろう剣道の所作や基本動作、礼法の様子に真剣に見入っていた。一通りパフォーマンスが終わったところで、今度は、ガネーシャ大学の学生による打ち込みの練習が行われた。竹刀を握り真剣な表情で、素振りをし、練習の成果として面を一本決めていた。剣道の礼儀を大切にする様子においては、インドネシアの文化やヒンドゥー教を敬い、相手を大切にする姿勢にガネーシャ大学の先生方も関心し、日本の文化の素晴らしさを褒めておられた。

次に本学学生による日本舞踊「祇園小唄」を披露した。日本舞踊の先生にご指導いただき、少な

い練習時間の中で、振りや扇子さばきを覚え浴衣姿の学生10人によるパフォーマンスである。「祇園小唄」は、日本舞踊で人気の歌詞であり、長田幹彦作詞、佐々紅華作曲、祇園をこよなく愛した長田幹彦が原作の映画「祇園小唄絵日傘」(昭和5年)の主題歌として大ヒットした。京都の名所、風景を散りばめ京の四季と舞妓の心情を歌った内容である。

前日にスティーバ・サラスワティー大学で披露させていただいたこともあり、なめらかで上手に踊ることができていた。また、楽器演奏が得意な学生による演奏も行い、フルート、サクソ、ピアノ演奏も喜ばれていた。ピアノなどは、バリには、多少はあるものの、まだそれほど広まっているわけではないとのことである。



その後、ガネーシャ大学の学生によるゲンジェク演劇のパフォーマンスが行われた。このパフォーマンスは、舞踊と演劇が合わさっており、伝統的な遊びに絡めて、演じ、仲良くしながら、芸術、舞踊、歌を高め、楽しむものである。

また、モダン創作ドラマ（劇）も演じてくれた。この劇のストーリーは、町の子がスマートフォンに夢中になっている。スマートフォンを通して、バリの伝統的な舞踊をみている。そこに村の子どもが楽しそうに友だちと遊んでいる。町の子はその楽しそうな様子を見て、スマートフォンばかりではなく、一緒に遊ぼうと仲間に入る。近代化が進むなか、伝統的な遊びが忘れられてきた。一人になると携帯ばかりに夢中になってしまいがちで、悪影響があるので、上手に使いながら、伝統的なことも大切にしましょうという内容である。やは

り、近代化が進む中で、現代の様子を反映したモダン創作ドラマであった。

それから、お馴染みのジョゲットという青春の仲良しの舞踊である。女性のダンサーが客席の人を誘う。誘われた人は、ダンサーを追うような仕草のダンスで、会場を盛り上げる。「青春の仲良しの舞踊」という若者が楽しむダンスという言い方もおもしろいと思った。誘われた学生や先生たちも見様見真似で、ダンサーを追うようにダンスし、会場を沸かせていた。

また、学生同士も仲良く交流する場面も見られ、片言ながらも楽しく、有意義が時間を過ごすことができた。

通訳してくれたスティーバ・サラスワティー大学の学生や、ガネーシャ大学の学生さん達が最善をつくしてくれことに感謝したい。





### タナロット寺院への訪問

タナロット寺院は、バリ島中西部タバナン県の海岸にあり、ヒन्दウ教のバリ六大寺院の1つである。干潮時には、陸続きとなり、歩いて渡ることができる。名前の由来は、真ん中の土地という意味のトゥンガ・ロットが変化したものと言われている。寺院の建立は、16世紀、ジャワの高僧ダン・ヒャン・ニラルタがこの地を訪れた時に海に浮かぶ岩礁の美しさに惹かれ、神々が降臨するにふさわしい場所として、村人に海の守護神を祀る寺院を建てるように勧めたのがはじまりだと言われている。タナロット寺院の素晴らしいサンセットを見るために多くの観光客が訪れている。

私たちが時間に間に合うよう移動をして行ったが、夕暮れ時のバリ島の混雑振りは凄まじいもの

がある。日本の道路と違い信号がほとんど無く（徐々についてきてはいるが・・・）ドライバーの阿吽の呼吸で交差点を渡る場面も多く、整列して走るといふよりは、通れる道幅があれば、並ばずとも走るといふ感じである。でもなんとか、寺院にたどり着くことができ、サンセットを眺めることができた。丁度干潮時になっており、岩礁の寺院の側までいくと洞窟があり、お坊さんにお布施を済ませ、お花を髪につけてもらい、聖水をかけていただいた。そして、寺院の途中の拝観が許されているところまで登ることができた。

夕日に照らされて浮かび上がる寺院やインド洋はとても神秘的だった。

